

# みんなで人権<sup>じんけん</sup>を考える「つなぐ」 TUNAGU II

そのだ ひさこ

「TUNAGU II」とは

人と人、心と心をつなぐ、世界とつなぐ一人権尊重のまちづくりの一環として、さまざまな人権問題について市民の皆さんと共に考えます。

私にはわからないような  
苦しきさ！

人には自分では選べないことがある。例えばどこ(地縁)で生まれたか、どんな親のもと(血縁)で生まれたかという事など。この地縁と血縁が、数百年にわたって部落差別の根っこにある考え方である。1970年代初頭、部落問題が教科書に掲載されたたかだか50年余であり、その地と血にもとづく差別的な偏見は今も根深い。

私は約40年、現場の教員や大学の部落問題論の講師をした。中学校教員時代、生涯、決して忘れない大切な出来事がある。クラスの中に数人の被差別部落出身の子もがいた。その中の一人のMは「部落」で生まれたことを悩みつづけ、ついに床に伏し登校できなくなった。何という痛さ！と思えども、どんな特効薬もなかった。いつも生徒に助けられてばかりの私の常とう手段は「ヘルプ・ミー」である。「子どもの問題は子どもに返す」という私の、そして教育の鉄則。それに従って、私なりの裏でできる工夫を凝らしたうえで「そこに生まれたことが、苦しくて悲しくてたまらない友達がいること」を一緒に考えてほしい！私に力を貸してほしい！と生徒に全力で問題提起や懇願

をした。

いろいろな意見発表後、Mにみんなが、私の心にズン！とおちた。目が覚めるような言葉があった。

『Mには本当に、負けてほしくない。Mは私のこと、本当の友達だと思っていないかもしれないけど、私は、本当の友達だと思っているよ。けど、やっぱり、Mにわかってもらおうの、むずかしいと思う。Mにはまけてほしくない！私もまけない！でも、苦しいだろうな。私には、わからないような苦しきさをもっているだろうな。けど、強くなれたらいいなあ、Mも。できるだけ力をかして、たりないだろうけど、ずーと、本当の友達でいたい。M、がんばれよー！友達っちゃない、私たち！』(一部抜粋)

この手紙をMに届けた。数日後、登校してきたMが「先生、本当の友達がおるよ」と、並んで雑巾がけをしながら耳元で言った。「私にはわからないような苦しきさ…」の一言がMの心に届いた。早々、解りあえるような苦しきさではないこと、それでも力を貸して一緒に生きようという温もりがMの心身を揺さぶった。心ふるえる優しさ、温かなエールをありがとうMに、私に。これは子どもたちから、深く学んだ出来事だった。

問 教育政策課

「水平社宣言」に学ぶ

今年「水平社宣言」が誕生して100周年の年です。日本最初の人権宣言と言われる「水平社宣言」は「人間を尊敬することによって、すべての人が平等で生き生きとさせる社会を作っていこう」というたい、「人の世に熱あれ、人間に光あれ」という言葉で結ばれています。被差別部落の人々によって作られたこの崇高な宣言は、小中学校の教科書にも載せられており、他人権問題と同様に子どもたちが学んでいます。子どもたちが書いた作文は、人権作文集「くさび」として、市の主な施設や教育政策課に置いていきます。ぜひ読んでいただきたいと思っています。

筑紫野市人権尊重の  
まちづくりスローガン

自分が人からされたり、  
言われたりして、  
いやなことは、  
自分は人にしない、言わない

平成29年度筑紫野市総合教育会議にて、子どもにも大人にも理解でき、実践に移せるスローガンとして決議されました。